

第三話 竜馬の視線(一)

一八八三年一月十五日、竜馬の生まれた上町一丁目の館の上に一匹のホウキ星が立ち昇っていました。ホウキ星は天高く長い尾を引きながら、やがて宇宙の彼方へと移動していききました。これは時代を動かした男「竜馬」の人生での門出を称えるに相応しい光景であるとともに、風雲児竜馬を象徴する風景でもあったのです。日本の近代化を求めて時代を駆け抜けた男、「竜馬」は天体で言えばまさにホウキ星そのもので、この年のハレー彗星も世間の注目を浴びながら勇壮に宇宙を駆け抜けていったのです。

時代は移って一九八六年、あれから三度目のハレー彗星が帰還した時、それを日本で最も早く発見したのは芸西村の「芸西天文台」でした。その事がマスコミによって広く報道されたため、ハレー彗星を見ようと日本各地から大勢の人が天文台や天下の景勝、桂浜に集まってきました。その中にはるばると東京からやって来たという二人の若い女性がいきました。

「私たちは今世紀最大の天体ショーと言われるハレー彗星を見たくて高知県に来たのですが、東を見ていいのやら西を見るのやら全く分からない素人です。どうか私たちを指導して下さいませ。」
という問いに対して私は、

「ハレー彗星を見たいならぜひ桂浜に行って坂本竜馬に習ってください。竜馬は先見の明をもって常に新しい時代をリードして来た人です、きっと最新の情報をもたらしてくれるでしょう。」

と、聊か突飛とも無責任とも言える返事をしてしまったのです。

こうして竜馬が生まれた年から数えて三回目の接近に当たる一九八六年の春三月のある朝、黎明を目前にしたここ桂浜には実に一〇〇人を越す大勢の人たちがハレー彗星を見ようと集まっていました。その群集の中に一際高く聳え立ち幽かな黎明の光を受けて輝いている竜馬の銅像の眼は、一体何を見つめているのでしょうか？『夜空を舞う龍』たるホウキ星から名前をもらい、不運にも未だそれを見ることの出来

なかつた竜馬の銅像の上に、時々刻々と天象は移り、やがて
壮大なドラマが展開されようとしていたのです。